



1917年の創業以来、同族経営のもとで歴史を紡いできた森田

鉄工所。創業家外のトップ就任は驚きをもって迎えられたが、先代の森田昌明社長（現会長）はそうした意思を

「自分、当初は「一族で100年以上つないできた企業は、そのまま続けるのがベターなのでは？」と思う部分もあったのだが、事業承継のための議論を重ねる中で「次の100年に向けて、創業家の思いを受け継いでいかなければならない」と決意を固めた。

■現場からの学び

入社後に配属された営業部門では、現場代理人の立場で施工に携わり、時にはバルブのメンテナンスや修理の

フォロイーに入ることもあった。振り返ってみると、そうした現場での経験の方が強く記憶に残っている。高校・大学とラグビー部で鍛えた生粋の体育会系

は、体力的にも、泥まみれになるのも全く問題なかったが、「水運用を切り回しながらバルブを取り替えていくような、技術的な工夫が求められる施工に苦労した。」

壁を乗り越えるカギになったのは、チームワークに他ならない。上司や先輩、協力会社のメンバーと相談しながらの試行錯誤があり、顧客である水道事業体からは叱咤激励と多くの教えがあった。「皆さんに育てていただいた部分が本当に大きく、それが営業活動の中にも生きた」と恩義を語る。

わゆる「右肩上がりの時代」を知らない。それゆえに、人口減少や老朽化といったネガティブなキーワードについても、過剰に悲観はしていない。「安定供給の継続が水道事業の使命、そこに貢献するのがわれわれの仕事。良い製品を提供し、アフターサービスをさらに充実させていく」とシンプルに言い切る。製品をより長く使

っていただけのように、今期からサービス課を再編したメンテナンス体制の強化と、工場持ち込み修理によるバルブの工場再生にも力を入れている。

かたや長期の視点では、国内の水道は相当なレベルに到達しており、人口減少と相まって市場の先細りが避けられないとの認識ももっている。将来的には

「地球規模での水需要の高まりからすれば、海外の水道に貢献できる企業になることも考えていきたい」と可能性を展望する。

■前向きな気持ちでこれからトッパとして目指すのは「幸福感や誇りを持てる企業」。

「製品を通じて上下水道という公共性の高い事業の一端を担い、人々の暮らしを支えている。社員には胸を張ってほしいし、それがご家族の幸せにもつながるはず」と願う。

しかし実際のところ、バルブが好きだから、森田鉄工所に憧れて入社する社員はほとんどいない。自身は若かりし頃から「ずっとこの会社で働きたい」と考えていたが、周囲に不思議がられることもしばしばだった。社長、28年取締役営業本

部長、令和元年常務取締役営業本部長などを経て、今年5月26日から代表取締役社長。昭和47年7月24日生まれ。

大学時代のラグビー部の監督は、日体大のキャプテンとして全国制覇を成し遂げた関口憲明氏。「寡黙な方だったが、チーム作りの在り方を学ばせていただいた」と影響を公言する。

信条は「人生は一度きり」。水関係のプラント会社に勤めていた父親の存在はあったが、就職の際は自分で考えて進路を決めた。自身が父親となった今、小学生の子供には「やりたいことをやればいい」というスタンスを取っているが、最近になってラグビーに興味を示してきたのはやはり嬉しい。



森田鉄工所社長 代表取締役

高橋 礼氏

創業家の思いを継いで

■より良く、長く 日本協の検査実績に基づけば、水道用バルブの出荷量は1996年。翌97年に入社した高橋社長は、い

は、国内的に水道は相当なレベルに到達しており、人口減少と相まって市場の先細りが避けられないとの認識ももっている。将来的には

「地球規模での水需要の高まりからすれば、海外の水道に貢献できる企業になることも考えていきたい」と可能性を展望する。

■前向きな気持ちでこれからトッパとして目指すのは「幸福感や誇りを持てる企業」。

「製品を通じて上下水道という公共性の高い事業の一端を担い、人々の暮らしを支えている。社員には胸を張ってほしいし、それがご家族の幸せにもつながるはず」と願う。

しかし実際のところ、バルブが好きだから、森田鉄工所に憧れて入社する社員はほとんどいない。自身は若かりし頃から「ずっとこの会社で働きたい」と考えていたが、周囲に不思議がられることもしばしばだった。社長、28年取締役営業本

※(株)日本水道新聞社の許諾を得て転載しています。記事の著作権は(株)日本水道新聞社に帰属します。